

巻頭言

「俗から聖へ聖から俗へ」

稲垣 稔

◆石原莞爾と宮沢賢治を結ぶもの

― 銀河文明への参加 ―

木下靖夫

●石原莞爾・評論に寄せて

世界文明の理想を求めて

会長としての所感

仲條拓躬

●会員使用

SNS

●コラム

●石原莞爾語録

目次

1

「俗から聖へ聖から俗へ」

向島労働基準協会事務局長 稲垣 稔



○歌舞伎座がこの正月、2月と続けて高麗屋三代、松本白鸚、松本幸四郎、市川染五郎の襲名披露で大賑わいとなった。普段はそれ程歌舞伎に熱を入れてはいない私だがどういふ訳か、昨年末から通い出しこの襲名披露興業も1月2月と連続して見た。

入り口で入場切符を切られて劇場に入り座席に着くともう、えも言われぬ感覚に包まれる。俗世界から分かれて聖なる別世界にスーッと吸い込まれて入っていくあの感動と幸福感は言い表すのが難しい。気持ちピン張り詰める特別の緊張感と高揚感、と同時にゆったりした落ち着きを感じるのだ。こんな聖なる別世界に入り込みたくて通ったのだが、この間、特に印象深かったのは2月公演の仮名手本忠臣蔵7段目、仁左衛門の平右衛門、玉三郎のお軽兄妹が初めて対面した時、由良の助から足軽である平右衛門の仇討への参加が許され二人が手に手を取って喜ぶ一茶屋の場面だ。二人の台詞の巧みさ踊りの上手さ、仁左衛門は人間国宝だから上手いのは当然として玉三郎お軽の姿の流麗さと声の張り、滲み出る色っぽさ、お色気プリンプンの女優とは全く違う綺麗さには驚かされ感心した。

実は、この公演を天皇、皇后両陛下が鑑賞したのでお目にかかることは出来なかった。○聖なる世界から俗世界に戻ると、そこでは相も変わらず森友だ何だと大騒ぎをしている。森友だけでは収まらず、働き方改革一括法案のうちの裁量労働制の対象拡大(改悪?)の根拠となった厚労省(私の出身役所だ)作成の実態調査結果の間違い(改ざん?)を巡っての騒動

があった。考えられないほど多くの間違いがあることが発覚したのでさすがに今の国会には拡大法案を提出しないとして決着をつけざるを得なくなったが、姿形を優しく変えてまたご登場させたいとする政府、経済界の意向が透けてよく見える。このほか、特定の専門業務に従事して年収1,075万円以上の労働者には労働時間規制をなくして割増賃金支払いも不要、休憩もなくてOKという「高度プロフェッショナル制度」が日本労働弁護団、全労連、日弁連などが猛反対している中で成立させようと躍起になっているようだ。経済界などでは将来、1,075万円をもっと下げて800万円更に500万円とする考えもあるといわれてもいる。

○「子を連れて西へ西へと逃げてゆく 愚かな母と言うならば言え」 俵 万智

3・11震災時仙台に暮らしていたあのサラダ記念日の作者 俵 万智が恐怖から西へ避難する決意をした時の心からの叫びの歌だ。「放射能は直ちに健康障害を及ぼすものではない」と「震災の映像見れば指しやぶり いよいよ激しき七つの心」これを見てそして作者は決意して石垣島に逃げたのだった。

「オレが今マリオなんだよ」鳥に来て 子はゲーム機に触れなくなりぬ」息子が先に島に馴染んだようだ。続いて母も少し遅れて「オヒルギ(マングローブ樹木に咲く花)の花ほとほと落ちる午後 無言の川をカヤックで行く」

島に土着して慣れ親しんで伸びやかに生活している作者の姿が目につかんでくる、そんな歌を歌えるように母も変わった。

生産性向上とか成果主義とか多様で柔軟な働き方だとかは全部嘘っぱちにですよとこの歌は教えてくれているように聞こえる。

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

石原莞爾語録 其の四

「石原莞爾のすべて」(菅原一彪・仲條立一著)から石原莞爾語録をご紹介します。

私は陛下の軍人である。いずれの任に赴くとも絶対に左遷ではない。私にそんな気持ちはみじんもない。任地で自己の任務に全力を傾倒する。これが軍人の本分である。織田信長に仕えた木下藤吉郎の偉さは、いかなる任務を与えられても、それに屈託することなく草履とりになりきり、馬屋番を命ぜられれば、またそれになりきり全力を盡したことである。軍人はこれではなくてはならない。他人は石原を左遷であるというて嘆く人もあるが私は絶対にそうは思っていない。

*一九三七年九月、関東軍参謀副長として転任の時。

東条は己を何と心得ているのか。成り上りの中将ではないか。それが上元帥の宮殿下をはじめ、総司令官に対して精神訓育の重要な訓戒をなすとは、天皇統帥の本義を蹂躪した不敬きわまる奴である。陸軍大臣は文官として政治に参与するものであり、全軍に精神訓育などできる身分ではない。戦陣訓などもつてのほかであり、統帥権の干犯である。軍人への訓諭は明治天皇陛下の軍人勅諭だけである。戦陣訓の如き不敬なもの断じて受付けない。師団将兵は戦陣訓読むべからず。

*一九四〇年一月、東条陸相名で戦陣訓が下達されたことに対して。

ノモンハンの敗戦は、惰眠をむさぼっていた

た日本陸軍に一大痛棒をくれたものだ。旧式戦術は、新戦法にはかなわない。怠け者で不勉強だとこんな目にあうぞ、と示されたようなものだ。

*ノモンハン事件後の所見。

どうもヒトラーはヨーロッパに戦争を起す可能性が大きい。これには日本がドイツ、イギリス、ポーランドの仲に入って、ポーランドに対するドイツの要求を多少認めさせる方法を講じて、ヒトラーに戦争を起させてはならない。ドイツがヨーロッパで戦争を起すようなことがあると、支那事変の解決はますます困難になる。私はできる限り、そうした手を打たせるように板垣陸相や知人に進言している。

*一九三九年一月、舞鶴要塞司令官時代の発言。

民族協和は、日本人の力を押しつけるものではない。誠心誠意を示し、たがいの精神と愛に生きるのである。

民族協和のためには、吾々はどこまでも、道義を尊重し、正義を堅持していくと共に、旺盛な生活力をもたねばならぬ。即ち、吾々は能力高く、しかも低き生活費に満足しなければならぬ。民族協和のために重要なものは、他民族の習性を悉知し、その長所を尊重することと他民族の語学を習得することなり。

*以上は京都師団長時代の発言。

日本民族は極めて優秀である。しかし、これによって、われわれが世界を支配するというが如き野望は断じて持たない。霸道的野望を持てば西洋人と選ぶところがなくなる。われわれは

時流に浮かされて、軽々しく日本民族の優秀性、特異性を他民族の前に示すべきではない。

われわれは、誤れる思想、信仰に対しては徹底的に闘う。自ら人種平等を唱えながら、ドイツの尻馬にのってユダヤ民族を排撃するのは間違っている。全世界に国土なく、到るところで虐待され、ひねくれ、悪いこともやってきたユダヤ民族を完全に改心させ、その所を得しめるのが天皇の大きな仕事の一つである。

*以上はマインカンブ批判より。

会費納入のお願い

会員の皆様の日頃からのご協力に深く感謝いたします。さて、会報は皆さまの会費で作成しております。最寄りの金融機関より今年度のお振込みを頂きますようよろしくお願い申し上げます。

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第144号 平成30年(2018年)4月25日発行